

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特准掛紙承認雑誌第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一刷一日発行)
平成十五年十月一日発行(第百六卷第十号)

ホトトギス

十月号



平成十四年十月五日 芦屋ホトギス会

二日目は晴れし旅路の爽やかに
爽やかに着こなす黒となりけり
ふとめまじり見え秋声聞きとめし
十月六日 関西野分会

色鳥の来てある狭庭見えてをり
青の射せば髪をたゞみぬ秋の山
大空に置けば時々秋の山
大山の秋の山容見つつ旅
十月六日 下萌句会

薄紅葉近く視界あるときに
霧飛んで大山蛾々と時々に
又変る山の表情霧去るに
どこまでも霧の変幻追うて旅
十月七日 ロイヤル俳壇

目隠しのフェンスやうやく郁子らしく
身に入むや今日仕上げねばならぬこと
体調の過信身に入む一日かな
紛れぬし一羽ならざる四十雀
十月八日 大阪倶楽部

林檎剥くときも彼女の几帳面
雨音に漸音重ねし秋の川
秋の卓飾る野の草のみならず
抱へ来し千草をどつと活けし卓
薄紅葉はじまつてある距離のあり
十月八日 綿業倶楽部

棲みつきし鳥を怖れ松手入
野菊叢より深まりし山路かな
鄙の野に摘めば野菊の手にあふれ
鳥の巢外してほしき松手入
十月十日 清交社

秋冷の横川に偲ぶ心もて
秋草を活け中心の生れたる
秋冷の俄かに至る消息も

秋冷ややうやく山を越す仕事
ひやくかな朝の目覚めでありしけり
芒活け一筋光る風のありしけり
旅疲れ消え晩秋の旅仕度
十月十一日 工業倶楽部

早曉の旅復成りし鳥渡りけり
山荘の修復成りし炬を開けり
萩刈りし庭より訪ねこられけり
やゝ寒に処す旅衣なりしかな
十月十二日 老柳山荘トープ

小鳥来よ萩のテラスに木の香り
はじまりし落葉に荘の新しく
炬開いて山荘今日は賑はへる
十月十四日 西の虚子忌

峰寺を沈め薄々紅葉かな
しづけさの露けきこといふ山路
露けしと言ひ快晴といふ山路
林檎むく器用不器用いづれとも
十月十五日 有恒倶楽部

落鮎の宿の灯ともりそめし頃
身に入むて一人山路を運転す
朝の間の露霜消えて出掛け来し
十月十五日 無名会

馬肥ゆる牧場の隅に句碑置きて
秋晴を捉へたるより山路かな
湖平ら山は立秋の晴
湖平ら山は立秋の晴
十月十六日 夏潮句会

半世紀ぶりの邂逅秋深し
迷ふ筈なき道なれど露けしや
鳥の巢外すことより松手入
渋滞のここにはじまる柿たわわ

稲刈の青空離れゆきにけり
木洩日を増やして松の手入かな
十月十七日 クラブ合同

わが行手よぎる影あり鳥渡る
秋高しわが心今全開に
菊の香を束ね抱きて祝ぎ心
佳信ゆ糸菊に托して伝へたかな
一門の菊の便りでありしかな
十月十九日 句会と講演の会

瓢の実を吹けば遠き日ありにけり
瓢となる音色沈めて瓢の笛
まだ瓢の笛とは言へぬ実を拾ふ
十月二十日 野分会

みちのくの雨の濃紅葉薄紅葉
小鳥鳴く山の雨あしつのでり来し
安達太良山いづこか霧の飛んでをり
十月二十三日 紅梅十周年

祝ぎ心松の手入の済みし庭
爽やかに語り継がれて来し仲間
子規語る俳諧語る館の秋
十月二十五日 時雨会

弾みたる昔話に濁り酒
秋耕を終へて夕影曳く家路
人骨の話うそ寒なりしかな
どびろことぬか漬で酌む仲間とか
忙しきことうそ寒を遠ざけし
朝の間の雲の動かずうそ寒し
十月二十六日 年尾忌

露けしや忌日の雨の上りても
東京に雨を置き来し年尾の忌
十月二十七日 ホトギス社 吟行会 越谷
淀む水流るる水も秋の晴
雨雫こぼす日の斑も竹の春
渡りたる風の篋も竹の春
行秋の雨一日晴一日かな
十月三十日 悼能美丹詠様

三瓶野に消えたる露の惜まるる

フィリピンの旅(その四)

稲畑汀子

百合の香りを抱いて降り立つた私達一行は案内されるまま建物の中へ入って行った。入口近くに立っていたアキノさんは我々を見ると手を広げにこやかに迎えて下さった。赤いドレスがよく似合う懐かしい笑顔である。

「よくいらっしやいました。随分早く着かれましたね」

綺麗な英語はよく分った。

「ありがとうございます。とうとうお訪ねできてうれしゅうございます」

私の英語は挨拶程度なのであとは田中大使とあやさんにおまかせである。抱いてきた百合の花束を受け取った側の女性はアキノさんのお嬢さんである。

ロビーの壁に大きなベニグノ・アキノ氏の写真が掛けられてありそこを抜けると小さい祭壇のあるチャペルがあり、祭壇には先ほど渡したばかりの百合の花束が高々と活けられて香りを放っていた。

アキノさんに導かれるまま祭壇の前に立つて十字を切った。地球ボランティア協会の仕事と旅の無事をお守り下さい、と心で祈った。ベニグノ・アキノ氏の波瀾の生涯を収めた映画を見

た後、展示されている部屋を案内された。

暗殺された時の血塗りの衣類は目を覆いたくなる。正面のガラスケースに飾られたロザリオは見覚えがあった。十年前、初めてわが家にアキノさん一行を迎えた時、これが暗殺されたアキノ氏の持っていたロザリオであると私の掌に渡して下さったことがあった。これはその時のロザリオだそうである。そのときの手の感触を思い出していた。フィリピンのために命を捧げたアキノ氏、その後で大統領に立候補して支持を受け当選された経緯を持つコラソン・アキノさんがいまここで我々を案内して下さっていることに深い感動を覚えた。

「カムヒア」

昼食の準備されている部屋はこの記念館の一画にあった。アキノさんは隣の椅子に座る私にさっそく話しかけてきた。

「メイ アイ スピーク イングリッシュユ？」

「イエス オフコース バット マイ イングリッシュ イズ ソー プア」

「オーノー、ユー キャン スピーク イングリッシュ ペリウエル」

しまった、と思いながら英語で話しかけてくるアキノさんの言葉を一瞬懸命理解しようと聞いた。わが家の孫のアシユレよりも分かりやすい英語である。ときどきタガログ語も混じるそうだが私にはそのようなことは関係なかった。

月末には日本で三洋電気株式会社の仕事があるので大阪へ来られるという。私は東京に行くのでお目にかかれなくて残念だと答え、何とか会話が進んで行った。

アキノさんの持つておられる地所は兵庫県と同じほどだと聞いて驚いた。収穫した砂糖黍を積んだトラックが勢ぞろいしているのも壯観である。車で案内して頂くアキノファミリーの住まいやゴルフ場は別世界であった。いつの間にか又パトカーが先導している。かつと照りつける太陽は南国のものであった。プールの青く澄んだ水を背にして写真を撮って貰う。

いつか、私のところの中にあつた日本の冬がすっかり消えているのに気がついていた。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十四年十月二日 一水会

鳥渡る空は平和でありにけり
踏み入れば茸を採す目となりぬ
十月二、三日 はつびい吟行会

再会は灯下親しむ館として
俳磚の庭秋の蚊に喰はれつつ
十月十日 虚子記念文学館投句
十月十二日 老柳山荘フオームお披露目句会

新秋の軍港といふ静寂かな
新米の立つといふ炊き方知らず
柿赤くなれば再び訪ふ古刹
秋深しひたすら愚痴を聞かされて
秋さぶや日帰りといふ富士比叡
十月十九日 ホトトギス社句会

濃紅葉を分けて玉原開け初む
うそ寒を纏ひ木道乾きをり
樾林数多 茸を従へて

虚子山盧野山の錦越えて着く
所得て落着く句碑に秋の声
十月十四日 西の虚子忌
十月十五日 草木瓜会

石路の花咲けば集へる一忌日
新酒呑み過ぎて宇宙をさ迷へり
杜氏の目こころが真劍新走
冷まじく変貌遂げし丸の内
新酒酌むあとはなんにもいらないと
十月二十三日 三番町句会

一斉に湧きて稻雀でありぬ
山粧ふとは樾林の一樹より
白樺に色を貰ひて秋の風

日当れば紅葉且散る山家かな
新走十二代目の杜氏若き
紅葉且眠らぬ街に散りにけり
紅葉且散りてふ言葉あり新走
十月十六日 蕉心会

虚子塔に集ふ一門露の縁
十月二十日 伝統露部会茨城ホトトギス会高俳句大会
年尾忌を明日に霞ヶ浦凜と
秋風や七つ 釘を偲ぶ湖
秋惜む霞ヶ浦の哀史もて
零戦の飛びし日もあり湖の秋
十月二十六日 年尾忌

天高きはつびい吟行会初回
馬肥ゆるワイン何本空けたやら
樾林 白樺 林 秋 天 下

虚子山盧完成なりて冬近し
叡山に野山の錦置く忌日
蕉翁の在す高きに登りけり
この後の新酒に心躍る句座
秋暑し蕉像の顔引き攀れり
秋風や日差を少し遠ざけて
秋日濃し水面に綺羅を成すところ
秋の雲消えゆく先の宇宙かな
十月十七日 登高会

鳶天に小鳥は木々に人は忌に
木の実落つ虚子も年尾も見し大樹
秋さぶや心正しき人の忌に
十月二十七日 ホトトギス社吟行会
シテの如小鳥来てある能舞台
能舞台大秋晴に鎮もれり
せせらぎに鳥語も和して苑の秋

白樺に色なき風の及びけり
頂上に声鏝めて小鳥来る
散り敷ける紅葉黄葉の坂険し

秋風や日差を少し遠ざけて
秋日濃し水面に綺羅を成すところ
秋の雲消えゆく先の宇宙かな
十月十七日 登高会

新秋の軍港といふ静寂かな
新米の立つといふ炊き方知らず
柿赤くなれば再び訪ふ古刹
秋深しひたすら愚痴を聞かされて
秋さぶや日帰りといふ富士比叡
十月十九日 ホトトギス社句会

雨男返上せよと秋の声
あれオリオンこれカシオペア星月夜
十月七日 蔵の会

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新秋の軍港といふ静寂かな
新米の立つといふ炊き方知らず
柿赤くなれば再び訪ふ古刹
秋深しひたすら愚痴を聞かされて
秋さぶや日帰りといふ富士比叡
十月十九日 ホトトギス社句会

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

新しき句会目出度し豊の秋
十月十日 土筆会 於虚子記念文学館
出来秋を車窓に虚子の懐へ
小鳥来て俳磚の庭目覚めゆく
秋灯下心竹少し疲れしか

雑詠句評（九月号より）

にも哀愁がある。それも秋という季節に推移した佻しさも加わって作者の夕心を詩情に誘ったのである。（汀子）

大いなるものの統べゐる花の闇 樞原 稲岡 長

闇は普段でも、どこか不可思議で、人には見通せないものである。まして花の咲く闇は、美の極みを孕んで素晴らしくもあり、同時に花の持つ神秘的なまろさや頼りなさ、不安も思わせるのである。その何れも全て、人の力を遥かに超えた「大いなるもの」によつて影響、統治されているのだ。

大いなるものの統べている花の闇はどんなに深く、美しいものであつたらうか。吉野の花の闇であれば、尚のことであらう。

（美奇）

蝸が鳴き移る森深い山里に住み、寢所のベットで夜明け前遠くの方から鳴きはじめた蝸に目覚める。今日も生かされている自分を確かめつつ、生きていると感じている作者。蝸を聞きながら意欲ある一日が始まるのである。

夕暮れ時にまた蝸が鳴きはじめ、そして鳴き遠さがる蝸の音色、その夕暮れの静寂を感じ取っている作者の詩心が伝わる。蝸の声を聞きながらしみじみと生きている自分を感じている心情の深い俳句である。（静龍）

蝸は山深い場所で鳴く。夜が明ける頃から鳴き始め、夕べ鳴き移りつつ遠さかるといふ一日は秋の山深いたすまいであらう。蝸の声は、夏の一番暑い頃に鳴く油蟬や熊蟬とは違って、鳴き方

（汀子）

同じ闇ではない。その闇には消えてしまった花の色や花の吐息までが塗り込められている特別な闇なのである。全てを闇に閉じ込められる力を大いなるものの統べいと表現した作者の感性が見えないものを見ているのである。力強い一句となった。

若水集

廣太郎選

河鹿・葵

太陽は中段にあり立葵 高松 矢野ほたる
 物影の斜めに走り立葵 同
 糸巻のやうに風巻き立葵 同
 川明かりとぎれ河鹿のお宿とや 西尾 鈴木マユミ
 山菜と水のおいしい河鹿宿 同
 せせらぎに喉を転がす河鹿かな 同
 宿下駄の音と河鹿と川音と 横浜 高浜礼子
 水の香の濃くなつてきし河鹿鳴く 同
 橋小さく河鹿の闇をつなぎけり 同
 光る瀬に河鹿の声の沸き出でし 福岡 松尾康乃
 瀬の闇を河鹿の声の彩れる 同
 アスファルト割つて群れ咲く立葵 同
 清流に神の声聞く河鹿かな 岡山 白石昌弘
 聖域に穢れし我が身河鹿笛 同
 毎日の髭剃る窓に立葵 同
 ざつくりと紅の切口立葵 甘木 空閑一叫子
 まだ空へ紅を気負はせ立葵 同
 上りゆく紅の遅速や立葵 同

溪流の光の隙間河鹿鳴く 群馬 木暮陶句郎
 夕河鹿らしく淋しくなつてゐる 同
 心まで河鹿の闇に溶けてゆく 同
 河鹿鳴き山河和風となりにけり 神戸 木村淳一郎
 翔べるかも知れず河鹿の声ならば 同
 河鹿鳴き峽の姿の決まりけり 同
 方角を耳が探して夕河鹿 香川 湯川 雅
 宿下駄を追ふ宿下駄や河鹿川 同
 仰角を広げてゆきぬ立葵 同
 島の娘の案内やさしき立葵 奥尻島 神部藻嶽
 風いたみせし庭隅のはなあふひ 同
 白壁に優しき影のぜにあふひ 同
 合併を拒む一村立葵 神戸 千原叡子
 瀬音昏れ河鹿の誘ふ有馬道 同
 鳴き出でて幽谷となる河鹿の瀬 同
 溪谷の闇に河鹿の声湧ける 坂出 溝淵和幸
 口笛を吹けば河鹿のこぞり鳴く 同
 上弦の月に河鹿の闇沈む 同
 河鹿鳴きいとしきものを遠くしぬ 長野 鈴木しどみ
 水離れあらぬ虚空に河鹿鳴く 同
 河鹿鳴きやむときしんと闇のあり 同
 屋を守るごとく山家の立葵 東京 川口利夫
 橋に聞く河鹿の谷の深さかな 同
 せゝらぎも河鹿も闇のものとなり 同

若水集句評 廣太郎

来る句である。

河鹿の眼くりくりさからはず生きて 北海道 佐藤宣子

糸巻のやうに風巻き立葵 高松 矢野ほたる

高さは二メートルほどにもなる「立葵」である。そこを咲き上って行く様を風と対比させて見事に詠んでいる。風が吹いて、花の揺れている姿が正に「糸巻」という語にぴったり嵌っており、活き活きとした動きが見て取れる。

せせらぎに喉を転がす河鹿かな 西尾 鈴木マユミ

見た目からだけで蛙の種類を気持ち悪いと思っている人は結構おられるようだが、この「河鹿」はその姿とは裏腹に綺麗な声で鳴くのである。「喉を転がす」という表現がそれを余すところなく伝えている。

咲きのぼることを迷はず立葵 香川 福江昌子

順に咲き上る「立葵」。「迷はず」と、まるでその花自体に意思があるような表現をした事によって季節の姿を的確に捉えている。その花の色までも伝わってくるような省略も見て取る事の出

蛙の種類全体に言えると思うが、「河鹿」も、グロテスクというよりはユニークな面構えをしていると思うのだがどうだろう。どうしても声の美しさが先にたつてしまいが、姿に着目した事により又ひとつ季節の姿が鮮明に見えてくる。

立葵花柔らかに開きけり 東京 福本美保子

開花する瞬間を見事に捉えている。カラフルな花が咲いた時、風に揺れているような様も見て取れるが「柔らか」と捉えたところにその花の色の鮮やかさが一層際立って目の前に迫ってくる句である。

水清く在れば河鹿の声までも 鳥取 椋 則子

もともと美しい声で鳴く「河鹿」であるが、水の清さとの対比から一層美しい響きを伴って聞こえてくるようだ。最後「声までも」と省略を効かせたところも秀逸である。